

Journal of Occupational Science (2017) 第24巻 2号

2017年の第2号には、作業科学と作業療法文献で頻繁に目にする2つの用語 *occupational disruption* と *occupational engagement* についての文献レビューが掲載されている。どちらも明確な定義がないという結果だが、それぞれの用語の複雑な概念の理解を深めることができる。

Occupational disruption (作業中断) についてカナダの Nizzero ら (2017) は、査読のある英語論文のタイトルか要約かキーワードに、*occupational disruption* が含まれている21文献を調べた。大半は医学的問題をもつ人が対象だったが、8文献は医学的問題をもたない多様な集団を対象としていた。6名の著者が作業中断を定義しており、アイデンティティ、作業の影響の多面性、作業中断への対応、作業中断の社会的・精神的影響をテーマとして論じていた。Nizzero らは、今後の研究のために Whiteford の定義を採用することを提案した。それは、「作業中断は一時的な状態であり、ライフイベント、移行、病気や怪我に続いて起こる作業の量や質の変化に伴うアイデンティティの中断により特徴づけられ、社会的情緒的機能を含む多面的な機能に影響を与える」である。*Occupational disruption* を作業崩壊と訳す人もいるが、Whiteford は難民キャンプで過ごす人や収監された人のように長期に渡り作業ができない *occupational deprivation* (作業剥奪) と区別して、*occupational disruption* を論じているので、作業中断という訳がより適切だと考える。

Sima ら (2017) は、2011年にオーストラリア東部を襲った超大型サイクロン「ヤシ」に伴う作業中断について、9名の住民にインタビューした。10年以上その土地に住む25歳から65歳の住民は、災害2年後にインタビューを受けた。5つの中核テーマ①作業の回復、②社会的作業、レジャー、生産的作業の中断、③再構築: 二次被害、④作業的宙ぶらりん状態、⑤新しい世界が浮上した。この結果から Sima らは、自然災害後の作業中断と回復のモデルを提案した。古い世界は、自然災害により壊され、回復のための作業が行われる。時間と共にレジャーや生産的作業が行われるようになるが、しばらくは宙ぶらりん状態 (liminality) が続き、やがて新しい世界ができるとプロセスを説明するモデルだ。

Fritz ら (2017) は、アメリカのデトロイトに住む55歳以上のアフリカ系住民を対象とした活動についての研究の一部として、近隣地域と作業の関係を知るための研究を

した。この地域には物理的にも社会的にも変化があった。対象者20名は、活動記録をつける1週間のあいだスマートフォンを持ち歩き、活動場面の写真を撮るよう依頼された。その後2週間以内に写真の内容と意味をインタビューされた。継続比較法を使ったテーマ分析が行われた結果、デトロイト地域の変化に伴い、作業参加が変わり、社会参加も変わったことがわかった。空きビルなどが増えたために日常の作業に注意が必要になり、近隣を守る行動がとられていた。

Occupational engagement (作業との結び付き) についてイギリスの Morris ら (2017) は、*occupational engagement* と *activity* あるいは *therapeutic activity* とが含まれている38文献を調べた。その結果、一致する明確な定義はなかった。遂行 (*performance*) を伴わない結び付き (*engagement*) があるとする Townsend と Polatajko (2007) の定義はあるが、他の著者たちは *engagement* に *performance* が付随すると捉えていた。作業療法や作業科学では、作業との結び付きが強まること (ポジティブ) を扱う文献が多いが、飲酒を止めるなど作業との結び付きを弱めること (ネガティブ) をとらえた文献もある。Morris らは、時代と共に多用されるようになった作業との結び付きについて、語源を参照しながら概念枠組みを提案した。参加 (*participation*) をニュートラルな起点として、個人にとって社会にとって価値が高まる (ポジティブ) 方向に興味 (*interest*)、結び付き (*engagement*)、夢中 (*absorption*) の順に結び付きが強くなる。夢中の先にフロー (*flow*) があるかもしれない。一方、参加する作業に対する価値が下がる (ネガティブ) に従い、無関心 (*indifference*)、離脱 (*disengagement*)、嫌悪 (*repulsion*) の順に結び付きが弱くなる。こうした作業との結び付きの程度の強弱は、時間と共に変化したり、個人の価値や社会の価値、作業を行った結果との関連で変化する。どのくらい強く (弱く) 結び付くかが、個人の健康状態などに影響を与える。*Occupational engagement* を作業従事と訳す人もいるが、*engagement* という語には、*commitment* (コミット)、*attachment* (密着)、*entangled* (絡んだ)、*involved* (関わった) という意味があることから、従事では行為者の意志の関与が少ない印象を受けるので、結び付きの方がよいと考える。研究の限界として Morris らは、作業療法や作業科学以外での

engagement の使われ方を考慮していないと述べている。Engagement の日本語訳には、サルトルが提唱したアンガージュマンがある。これは人が自由な主体として社会に関わるといった意味がある。Morris らは哲学における engagement の使用について言及していないが、engagement には当事者の意志が重要だと考えられる。当事者の意志の関与を重視することは、Morris らが、engagement の強さの程度は外から観察して知り得ることはできないと述べていることともつながる。作業療法士の持つべき技能の一つに engage (結び付け) があるが (Townsend 他, 2007), Morris らの枠組みを使うと作業療法士がクライアントに何らかの作業への参加機会を創設し、クライアントが興味をもち、結び付き、夢中になるような方向に進めば、その作業の効果が高まっていくという状況を説明できる。Morris は、慢性の精神障害をもつ男性 5 名の作業を研究する過程で、occupational engagement の理解を深める必要があると考え、この研究を行ったと述べている。作業との結び付きという訳語が適切かどうかも含めて、作業科学の用語について議論を続ける必要がある。

ホームレスを対象とした質的研究 2 件と事例報告がある。Marshall ら (2017) は、カナダ郊外の 12 名のホームレスにインタビューして、時間利用と作業と作業の意味を調べた。作業疎外 (occupational alienation) の経験を、退屈で気がおかしくなる、同じ所を回る、自分のことがきちんとできない、スキルの喪失と語った。また気分を変えようとい状態になるようなことをしており、プライバシーのなさや社会的排除の経験もしていた。その中でも他者の面倒をみたり、日々生き延びる努力をしていた。Thomas ら (2017) は、オーストラリア地方都市のホームレス 33 名にインタビューして、作業と健康との関連を調べた。この地域のホームレスは、独身男性、シングルマザー、先住民という 3 タイプがあった。ホームレスという語で括られる集団に含まれる個人は、地理的条件や個人の背景により多様であることがわかる。Gruhl (2017) は、busking (投げ銭をもらう大道芸) という作業をする精神障害者の事例を報告した。彼は大道芸を通して世界に対して自分を可視化した。大道芸をするには恥ずかしさやスティグマ、身体の健康、天候という問題をクリアしなければならないが、自身の健康を高め、社会的アイデンティティを確立し、文化や家族とつながり、社会に貢献することにつながっていた。

Silva ら (2017) は、アフリカの東部からスウェーデンにきた移民で、ポリオの後遺症をもつ人 12 名にインタビューを行い、グラウンデッドセオリーにより、作業参加

のプロセスを明らかにした。対象者は、価値とアイデンティティ発展のために、①日常作業を修得し、②日常生活に意味を見出し、③場所や他者とつながり、④集団に所属し、⑤他者を信頼していることがわかった。このプロセスは行ったり来たりしながら、相互に関連し合っていた。

Man ら (2017) は、関節炎の治療として膝関節置換術を受けた人 9 名にインタビューを行い、症状が日常作業にどのように影響しているかを明らかにした。手術前の経験について質的テーマ分析を行った結果、①関節炎と生きる、②自分の作業アイデンティティを徐々に喪失する、③あまりに多くを失う転換点、という 3 テーマが出現した。膝関節置換術は治療成績が良好だとされているものの、作業への影響は、手術を受けるかどうかの判断や治療成績の判定に考慮されていない。この研究の結果は、患者の生活を作業の視点でみていくことの重要性を気付かせてくれる。

Walder (2017) らは、慢性疾患をもつ人や健康上の問題を抱えることになった人がどのような経験をして適応したり、アイデンティティを回復しているかを探るために文献研究を行った。精神疾患と緩和ケアについては除外した。キーワードは qualitative (質的) と、recover* (回復、* は recover を含む語すべてという意味で、recovery など含まれる)、resilien* (弾力性)、coping (コーピング)、cope (処理) のうちの一つを組み合わせて、データベース PubMed, Scopus, CINAHL, OT Seeker で検索した結果、6832 件ヒットしたが、重複を削除すると 322 件になった。要約を読み基準に合致した論文は 188 件となった。全文を読み基準に合致した論文は 75 件だった。批判的吟味を行い質の低い論文を削除すると 37 文献が残った。文献の内容をデータとして、グラウンデッドセオリー分析を行った。日本を含む 12 カ国で行われた研究が含まれていた。対象者数は 487 名で、多様な研究方法が使われていたが、インタビューとフォーカスグループが多く、グラウンデッドセオリーや現象学的アプローチが多かった。個々人の調整 (adjustment) プロセスは多様だったが、中心となっていたのは、作業中断や作業喪失といった初期段階から、作業的健康を再獲得するプロセスだった。このプロセスには、①コンピテンス (能力) の発達、②モチベーションの発見、③自信の獲得が含まれていた。コンピテンスの発達には、習得と受容、知識の獲得、情緒的安定、身体的健康の維持、財源、援助の受け入れ、変化への適応が含まれた。モチベーションの発見には、希望をもつ、選択肢をもつ、コントロール感を手にする、目標設定、所属意識、必要とされていると感じる、貢献するが含まれた。自身の獲得には、能力があることを感

じる、支えられていると感じる、恐怖の克服、日課の形成、納得、優先事項の再評価、理解されていると感じるが含まれた。

研究論文ではないが、コメントとして Sofo と Wicks (2017) が貧困と貧困軽減について作業的視点を使うことを主張した。作業科学では、参加型作業的公正枠組み (Participatory Occupational Justice Framework) (Whiteford, et al, 2017) が知られているが、SEED-SCALE (Taylor, et al, 2012) も行うこと (doing) に焦点を当てている点が共通しているという理由で、この枠組みを紹介している。貧困状況を解消するために、個人が行う作業に着目していくのである。

本誌の研究論文を読むことは、研究法の勉強になる。本誌の 10 件の研究論文のうち、3 件 (Nizzero ら, Morris ら, Walder ら) が文献研究だった。文献の検索から選択までのプロセスの詳細が記載されていることは、文献研究を行う際の参考になる。大規模研究の一部として行われた研究 (Frits) や、他の研究のデータを使って、異なる研究疑問にこたえる二次的分析 (Silva ら, Man ら) もあった。インタビューを行った質的研究は 7 件あり (Sima ら, Fritz ら, Marshall ら, Thomas ら, Gruhl, Silva ら, Man ら), その内 1 件は 1 事例の報告だった。分析方法は、グラウンデッドセオリー (Silva ら, Walder ら) やテーマ分析 (Fritz ら, Thomas ら, Man ら) の他に、Sima らは, Sandelowski (2010) の文献を引用し質的記述的研究を使い, Marshall らは, Colaizzi (1978) の方法の修正版を使い, Gruhl は, Spradley (1979) の領域分析を使っていた。グラウンデッドセオリーを使った研究においても, Silva らは二次的分析用に Whiteside ら (2012) の方法を使い, Walder らは Kearney (1998) の方法を使っている。テーマ分析においても, Fritz らは, Boyatzis (1998) と Charmaz (2006) の方法を使い, Thomas らは, Rubin ら (2005) の方法を使い, Man らは, Braun と Clarke (2006) の方法を使っている。質的研究の方法論が数多くあることに混乱し, 引用された文献の発行年が比較的古いことに驚く。しかし, どの方法も言葉をデータとして, 意味をとらえて, その意味を表す言葉を作り出し, 全体の構造を理解しようとしている点は共通している。

作業中断や作業の結び付きといった作業科学の用語の概念化と, そのプロセスの共有は重要である。作業は私たちの生活の日常にあり, その作業にまつわる現象を説明する言葉も日常にある。この馴染みのある言葉で表現される複雑で深い概念を理解していくプロセスに, 参加する人が増えることが, 作業科学の発展に寄与するだろ

うという感想をもった。

吉川ひろみ (県立広島大学)

文献 (引用順)

- Nizzero, A., Cote, P. & Cramm, H. (2017): Occupational disruption: A scoping review. *Journal of Occupational Science* 24(2), 114-127
- Sima, L., Thomas, Y. & Lowrie, D. (2017): Occupational disruption and natural disaster: Finding a 'new normal' in a changed context. *Journal of Occupational Science* 24(2), 128-139
- Fritz, H. & Cutchin, M.P. (2017): Changing neighborhoods and occupations: Experiences of older African-Americans in Detroit. *Journal of Occupational Science* 24(2), 140-151
- Morris, K. & Cox, D.L. (2017): Developing a descriptive framework for "occupational engagement". *Journal of Occupational Science* 24(2), 152-164
- Townsend, E. & Polatajko, H. (2007). *Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision for health, well-being & justice through occupation*. Ottawa: CAOT Publications.
- Marshall, C.A. Lysaght, R. & Kyrupa, T. (2017): The experience of occupational engagement of chronically homeless persons in a mid-sized urban context. *Journal of Occupational Science*.24(2), 165-180
- Thomas, Y., Gray, M.A. & McGinty, S. (2017): The experience of occupational engagement of chronically homeless persons in a mid-sized urban context. *Journal of Occupational Science* 24(2), 181-192
- Gruhl, K.R. (2017). Becoming visible: Exploring the meaning of busking for a person with mental illness. *Journal of Occupational Science*.24(2), 193-202
- Silva, I.S.T., Thorén-Jönsson, A., Sunnerhagen, K.S. & Dahlin-Ivanoff, S. (2017): Processes influencing participation in the daily lives of immigrants living with polio in Sweden: A secondary analysis. *Journal of Occupational Science* 24(2), 203-215
- Man, A., Davis, A., Webster, F. & Polatajko, H. (2017): Awaiting knee joint replacement surgery: An occupational perspective on the experience of osteoarthritis. *Journal of Occupational Science* 24(2), 216-224
- Walder, K. & Molineux, M. (2017): Occupational adaptation and identity reconstruction: A grounded theory synthesis of qualitative studies exploring adults' experiences of adjustment to chronic disease, major illness or injury.

- Journal of Occupational Science* 24(2), 225-243
- Sofu, F. & Wicks, A. (2017): An occupational perspective of poverty and poverty reduction. *Journal of Occupational Science* 24(2), 244-248.
- Whiteford, G., Townsend, E., Bryanton, O., Wicks, A. & Pereira, R. (2017). The Participatory Occupational Justice Framework: Salience across contexts. In Sakellariou, D. & Pollard, N. (Eds.), *Occupational therapies without orders: Integrating justice with practice (2nd ed.)*. London, UK: Elsevier. pp. 163-174.
- Taylor, D.C., Taylor, C.E. & Taylor, J.O. (2012). *Empowerment on an unstable planet: From seeds of human energy to a scale of global change*. New York, NY: Oxford University Press.
- Sandelowski, M. (2010). What's in a name? Qualitative description revisited. *Research in Nursing and Health*, 33(1), 77-84. doi: 10.1002/nur.20362
- Colaizzi, P. (1978). Psychological research as the phenomenologist views it. In R.S.Valle & M. King (Ed.), *Existential phenomenological alternatives for psychology*. New York, NY: Oxford University Press. pp. 48-71.
- Spradley, J.P. (1979). *The ethnographic interview*. Orlando, FL: Harcourt brace Jovanovich College Publishers.
- Whiteside, M., Mills, J. & McCalman, J. (2012). Using secondary data for grounded theory analysis. *Australian Social Work*, 65(4), 504-516. doi: 10.1080/0312407X.2011.645165
- Kearney, M. (1998). Ready to wear: Discovering grounded formal theory. *Research in Nursing Health*, 21, 179-186. doi: 10.1002/(SICI)1098-240X(199804)21:2<179::AID-NUR8>3.0.CO;2-G
- Boyatzis, R.E. (1998). *Transforming qualitative information: Thematic analysis and code development*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Charmaz, K. (2006). *Constructing grounded theory: A practical guide through qualitative analysis*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Rubin, H. & Rubin, I. (2005). *Qualitative interviewing: The art of hearing data*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Braun, V. & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology, *Qualitative Research in Psychology*, 3, 77-101.
- 翻訳協力者
 高島理沙 (北海道大学)
 高木信也 (絃仁病院)
 中村拓人 (神奈川県立保健福祉大学)
 馬場博規 (磐田市立総合病院)
 鴨藤祐輔 (訪問看護ステーション不動平)